

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第38号 2023年4月30日 発行

目次

- | | |
|---|----------------------------------|
| *展示館から福沢研究へ（山田博雄）…………… 2・3 | *新収資料紹介…………… 9 |
| *つなぐ場、つなぐ物、つながる人（清水唯一朗）… 4・5 | *主な動き…………… 10 |
| *「歴史」を学ぶことの普遍的な重要性と
展示館から得られる「智徳」（川原慶己）…………… 6・7 | *センター諸記録（2022年10月～2023年3月） …… 11 |
| *戦う人、愛の人—回想の寺崎修先生—（都倉武之）… 8 | *スタッフ一覧…………… 12 |



展示から研究へ、研究から展示へ
— 展示の可能性を考える —



2021年7月に開館した福澤諭吉記念慶應義塾史展示館では、福澤諭吉・慶應義塾に関連する歴史資料を常時入れ替えながら展示する。それに加えて、年に2回企画展も開催している。単に歴史的に明らかにされている事実を、資料展示を通して紹介するのではなく、資料展示を機会として、福沢・慶應義塾史を通じ日本の近現代史に新たな光を当てることを目指している。本号では、開館以来の当展示館の活動に関心をお寄せ頂いた方3名にご寄稿頂き、研究機関としての福沢研究センターの活動が、今後展示館の資料展示を通して広げうる可能性について考えたい。（都倉）



展示館から福沢研究へ

中央大学法学部兼任講師 山田博雄

慶應義塾史展示館の開館は、福沢研究にどのような影響を与え得るだろうか。

一般に「展示は学術的にあまり評価されない」嫌いがあるのではないか。あるとすれば、理由の一つは、役割や目的に係わるであろう。展示は啓蒙であり、学術は研究を主とする活動である。展示は万人に開かれたものであり、扱う内容は薄く浅いもの、学術は一部の人たちに閉じられたものであり、内容は濃く深いもの。別にいえば、展示は、主として不特定多数の「素人」「非専門家」に向けて、その時までの研究の到達点を示して見せることを目的とし（いわば静態的）、学術は、ある分野の高度の知識をもつ特定少数の「玄人」「専門家」の間でだけ営まれ、最新の研究の到達点を乗り越えることを目指す営為である（動態的）。——もしこのように考えるとすれば、冒頭の一節はふしぎではない。

展示が「あまり評価されない」理由の二つは、形式にも係わるかもしれない。少々うがった見方をすれば、展示は、主に「見る」ことのできるモノを扱い、学術は、「読み」「考え」「書く」ことのできる書物や論文など、抽象度の高いものを扱う。ゆえに展示は学術的にたいしたことはあるまいと高をくくっている向きもあるかもしれない。

しかし事はそれほど単純ではない。そもそも学術と最も広い意味でのモノ（事実）とは、切り離せない。《モノから出発して、モノに即して分析し、解釈し、理論化しようとする一連の営為》が、学術活動の基本であろう。モノが未知であり、それに導かれて新知見を得るに至れば（至らない場合もある）、研究対象の解釈は変わり、評価は変わり、学術は発展する、という順序である。稀にはおおよそ既知のモノだけを扱いながら、読みの深さや発想の斬新さによる新解釈の提出もあり得るだろう（たとえば丸山眞男の「福沢論吉の哲学」）。しかし従来の評価をくつがえす可能性は、未知のモノから得られた新知見によるほうが断然大きいことは論をまたない。論より証拠（モノ）。

近年の——といってもすでに四半世紀になるが——福沢研究で、《モノの発見・発掘→分析→解釈→理論化》の過程を比較的きれいに示す例は、『時事新報』論説の執筆者特定問題である。福沢自筆の原稿か、他の記者が執筆した原稿か、またはその他か、などを示すモノが見

つかった（『福沢論吉年鑑』22号、1995年、参照）。いつとき福沢研究の画期となるかと期待されたのは当然だろう。ところが分析→解釈の検討が進むにつれて——それ以前にもすでに批判はあったが——、論説執筆者の特定が（それ自体の意義はあるとしても）、必ずしも福沢解釈・評価の変更をもたらさないのではないか、という展開になった（十分に成功したとはいえない理論化）。

執筆者の特定問題は、結果的には別の問題提起をなすきっかけとなった。すなわち『時事新報』論説を、福沢個人でなく、福沢を枢要な人物の一人とするところの団体（社中）——「福沢工房」（松崎欣一）とか「福沢ゼミナール」（西川俊作）とも形容される——による、協働製作体制の著作物とする視点の浮上である（協働製作体制は『時事新報』に限らない。この分野の研究は今後の課題となるであろう。現在刊行中の『小幡篤次郎著作集』は有力な手がかりの一つになり得よう）。

慶應義塾史展示館についていえば、少なくともその図録類を見る限り、展示を学術的に低くみるのは誤りである。たとえば図録『2022年春季企画展 慶應野球と近代日本』、ことに同『福沢論吉と「非暴力」——学問のすゝめ150年』（ともに非売品）を見よ。《モノの発掘から理論化》に至ろうとする一連の営為は、目覚ましいばかりの成果を挙げつつあるのではないか。

一例として図録『福沢論吉と「非暴力」〜』をあげよう。そこには「学問のすゝめ150年」展示企画準備に際して発掘された、さまざまなモノが掲載されている。写真や絵など、鮮やかな色彩でモノが盛り込まれて、紙上展示とでもいうべき趣がなくもない（非専門家向けの）。

しかしそれだけではない。他方で、たとえば同図録所載の解説文「小川武平は何を読んだか——『学問のすゝめ』と長沼事件」（4000字ほど。都倉武之執筆）は、先行研究を検討し、図録掲載のモノ（書簡など）を引用し、分析し、武平が読んだのは『学問のすゝめ』初編である、と結論する。むしろこの結論自体、学術的な評価に値しないわけがないであろう。しかし福沢研究を概観するとき、この結論よりもはるかに重要なことは、結論に至る推論の過程であり、その理由の説明である。なぜならば、その論の運びは、少しもブレずに——モノの細部に拘泥し過ぎて、研究の大局を見失う瑣末主義に陥ることなく——、狙い正しく福沢思想の解釈・評価の核心に迫っ

ているからである（この場合の核心とは、福沢における「非暴力」の思想的意味に係わる。専門家向けの）。

しかしこの図録の解説文「小川武平は何を読んだか」はまだ序の口にすぎない。

もう一つの例をあげなくてはならない。上の解説文の内容をより詳細に展開したエッセー、「長沼事件から官民調和論へ」（4000字ほど。都倉武之、『福沢手帖』195号、2022年）である。このエッセーは『学問のすゝめ』に見える福沢の「非暴力」の思想的意味を「官民調和論」の思想的意味へとつなげて理解し、福沢の「文明」観にまで説き及ぶ（専門家向けのな、より深まりゆく内容）。

すなわち第一に「長沼事件」。『学問のすゝめ』を読んだ者——著名な思想家などではない「学問とは縁遠かった人々」——が「どのような影響を受けたか」という、「実証することは難しい」（実際、これは極めて難しい）問題に切りこむ。幸いにも「長沼事件」は、それを具体的に知り得る「希有な事例」といい、「学問とは縁遠かった人々」の一人、小川武平の考え・行動の変化を通して、『学問のすゝめ』がいかにか強くて大きい影響を与えたかが活写され、実証される（おそらく先行研究は絶無である）。そしてエッセーは『学問のすゝめ』で殊に重要なのは「政府に対して不平を抱くことならば、……静にこれを訴て遠慮なく議論すべし」という点（「非暴力」）だと強調する。

そこで第二に「官民調和論」が来る。以上の分析を踏み台にして、議論は跳躍、在来の「官民調和論」解釈に対する異論提出に向かう。「官民調和論」は、これまでしばしば明治政府（権力）に対する福沢の無批判的な態度、不徹底な思想として、否定的評価を与えられてきた（例外は伊藤彌彦『維新と人心』〈1999年〉くらいだろうか）。なぜ「官民調和論」は不評なのか。著者は、学界に暗黙のうちに不問とされるべき前提があるのではないかと疑う。「官と民とは論理必然的に調和してはならないし、調和を口にするこすらす許されないという考えが、思想史において厳然と存在しているからであろう」と。しかし実際のところ、「長沼事件と福沢の関わりが示しているのは、福沢による、官と闘う民の支援であると同時に、官に憤る民の暴発の抑制なのである。時間はかかっても非暴力で粘り強く打開していく道へと村民を誘ったのだ」。——（ちなみにわずかこれだけの引用文中に、福沢研究のいくつもの争点と福沢思想の核心部分が、先行研究への批判を含んで、いかにサラリと表現されていることだろう……）。

以上の二例、「小川武平は何を読んだか——『学問のすゝめ』と長沼事件」と「長沼事件から官民調和論へ」

は、両者併せて「長沼事件」→小川武平→『学問のすゝめ』→「非暴力」（本稿では触れなかったが、「佐倉宗五郎」に関するほとんど知られていないであろう重要な事実の指摘もある）→「官民調和論」（→文明論）へ、という議論の進み行きになっている。ここには《モノの発見・発掘→分析→解釈（→理論化）》の過程が、大変鮮やかに見てとれるのではないだろうか（もっとも、理論化のためには、さらなる研究が必要だが）。これが——というのは、つまり一方には非専門家向けの、他方には専門家向けの、各々の目的に十全に応えようとする試みが——、どれほど“高度な作業”であるかは、研究者なら誰でも経験的に知っているはずである。

それにしても、展示作業を通してこんなにも遠くまで行くことができるのか！ ここでの一連の作業を根底で支えているのは「次から次へと事件の思い出を書き残した武平の手紙」という、小さなモノたちに他ならない。議論の透明性と説得性も確かにそれに依っている。図録の解説文もエッセーも、いわゆる「論文」ではないし、十分まとまった分量でもない。しかしこれらが学術的な貢献でなくて何であろう。

慶應義塾史展示館開館から二年、すでにして展示館は、このように瞠目すべき研究成果を地道に生み出している。——いや、それはたまたま「長沼事件」が運よくモノの発掘に行き当たったので、そういつも首尾よく新知見をもたらすモノが出てくるはずがない、今回は万に一つの例外だと考えるほうがあるいは自然かもしれない。だが、ここで見てきたこともまた事実である。

展示館は、福沢研究から見て、前人未到の地を切り開く、底知れぬ力を発揮する可能性を秘めているのではない。誇大な希望的観測だろうか。未来のことはわからない。ただ慶應義塾165年の歴史で初の試みである展示館は、未知数の面白さ、自由さがある（ように思える）。大学でも研究所でもない、万人に開かれた、より民主的な場でもある。その意味では「始造」の精神と「世俗」（大衆性）の尊重は、この展示館には殊に相応しいといえるかもしれない。

福沢関係のモノの発掘集積の場としての福沢研究センターを背景にもち、モノから得られた新知見を広く誰にでも情報発信しようとする慶應義塾史展示館は、現在望みうる最も有益な福沢研究の最先端の一翼を担う。

注 慶應義塾史展示館に関連した文献などについてはさしあたり『福沢論吉年鑑』48号、49号（2021年、2022年）所載の「研究文献案内」を参照されたい。



つなぐ場、つなぐ物、つながる人

慶應義塾大学総合政策学部教授 清水 唯一朗

過去と現在を、現在と未来をつなぐ場がようやく生まれた。塾史展示館が開館した際、強い安堵感と希望を覚えた。そうした場の不在が長く困りごとであったからだ。

今から28年前、世界がウィンドウズ95のリリースに沸く1995年11月23日、三田キャンパスでははじめてとなるキャンパスガイドツアーが開催されていた。主催したのは福利厚生団体のスチューデントカウンセラーズ(SC)。今や各地の大学で定番となったキャンパスツアーも、当時はまだ国内では先例のない先進的なものであり、アメリカ留学から帰国したばかりの先輩が三田祭の目玉企画として持ち込んだものだった。

ツアーの台本は三田に常駐する文学部2年の先輩たちが中心になり、広報室の(おそらくは福沢研究センターからも)協力を得ながら作成された。法学部の1年生だった私も歴史好きとおせっかい癖が嵩じて末席で関わらせていただいた。幸いにもツアーは好評を博し、三田祭が終わったあとも、広報室から依頼を受けて修学旅行生などに提供された。私にとっても学部・大学院生時代を通じて、研究の合間に高校生と談笑しながら楽しめる、ありがたいアルバイトになった。

ツアーが案内するのは、メディアセンター(の外観)、西校舎の掲示板、生協食堂と山食、大教室、研究室棟(の1階にある在室掲示)、塾監局(の外観)、福沢公園、そして旧図書館(の外観)だった。主な対象は高校生であり、学生生活がイメージできればよいということだったが、それにしても150年の歴史を持つ大学に来てもらいながら、それを感じられる場が少ないことが残念だった。たまりかねて旧図書館の扉を開けて、スタンドグラスの前に生徒たちを招き入れて解説をしていると、しばしば某所の扉が開いてお叱りをいただいた(その節はご迷惑をおかけしました)。

その後、広報室の調査役であった小鷲武光さんのご尽力で演説館をコースに入れていただけるようになり、状況はやや改善した。とはいえ、台本を少々アレンジした学部生の話ではなんとも心もとなく、来訪者に申し訳なく感じられた。同期には、演説館で朗々と「丘の上」を謳いあげる御仁もいたが。

心もとなさは大学院生になっても変わらなかった。日本政治史を専攻してはいたが、私の専門は明治後期から大正期の政官関係であり、義塾についても、福沢についても、通史のテキストを超える理解を持ちあわせてはい

なかった。少しは大人になり、義塾の公式見解も気になるようになった。同期の小川原正道さん、指導教授の在外研究中に仮親を務めてくださった寺崎修先生にそのつど教えていただきながら、なんとか薄氷を渡っていた。

それから10年ほどして、ある方のオーラルヒストリーを旧図書館の小会議室で行うことになった折に、八角塔にあった展示室を案内していただいた。こんな部屋があったのかと驚いたが、やや無造作に置かれた乳母車や筆洗、そしていくつかの文書の実物を見ながら受けた、要点を押さえながら間を取る説明は格別だった。義塾が歩んできた歴史のなかを自分も進んでいる感覚に包まれる思いがした。

同時に、ひどく反省した。かつて自分がかかわってきたツアーでは、ひたすら頑張っちゃべり続けていた。それでは来訪者に思索をめぐらす余地はなかったと。とはいえ、悪いのはツアーの担当者でもなかろう。限られたコースを補うべく必死にしゃべっていたのだから。この展示室のように、モノやテキストを眺めながら自分のペースで見て、それらと黙しながら対話することができれば、押しつけではない、補助線となる適切な解説があったらと話したことを覚えている。

それだけに展示館ができるとうれしかった。しかも開設準備の中心になるのは、あのときにとても心地よい説明をしてくれた都倉武之さんだという。心が躍り、2021年7月、開館から時を経ずに訪ねた。妻と二人で2時間、じっくり満喫させていただいた。

それから三田キャンパスで研究会があるたびに学外の知人を連れていくようになった。昨年秋に入国管理が緩和されてからは、堰を切ったように来日する海外の日本研究者をご案内してきた。同行はするが、都倉さんに倣い、説明は各セクションの冒頭での導入にとどめ、あとはそれぞれのペースで見させていただいている。そうすると、どなたもそれぞれに関心があるモノや掲示されている解説を見て、自らの関心と結び付け、じっくりと対話される。30分くらいと言っていた方が、1時間、場合によっては2時間ほど滞在される。

気になるものがあつたら声をかけてくださいねと伝えておくと、めいめいに所感を話してくれる。それに対して、こちらも考えを伝え、交換する。以下、展示に沿って、そうしたやりとりをいくつかご紹介していこう。

導入の動画はとても好評だ。学生たちはナレーションが

岩ちゃん(岩田剛典氏。塾員。三代目JSOUL BROTHERSのメンバー)であることに気づき、歓声をあげる。そして、彼の声で説かれる半学半教の精神に強くなずく。インタラク션을軸に進む講義や、円形でディスカッションを深めるゼミの淵源と目的がそれぞれの腑に落ちていく。

研究者の方には松永安左衛門の蔵書が旧図書館にM系列として所蔵されていることをお話している。そこから派生して、ヨーロッパから来た日本研究者の方に橋川文三文庫(H系列)についてお話したところ、明治大学で教鞭を執っていた橋川の蔵書が慶應にあるとはと、見学を済ませてすぐに閲覧に向かわれた。

最初の角を曲がったところにある図書館の歴史の展示では、多くの方が溶けたステンドグラスに目を奪われる。1階で手古奈像の来歴について話し、ステンドグラスの意匠を解説したことがここでつながってくる。戦争の記憶アーカイブに取り組んでいた学生は、ここで戦争を体験された方に当時から持ち続けているモノを持参してもらい、それを話し手と聞き手の間においてインタビューを行うという手法を見出した。

「颯々の章」では、研究者よりも学生の方がヴィヴィッドに反応する。とりわけ、交換留学を予定している学生たちは自分たちの来し方とこれからは福沢の青年期を重ねるようだ。「ドヤ顔」とキャプションが付くサンフランシスコでの写真も、学生には発見や学びを形にした福沢の慧眼と映る。自己顕示と捉えてしまう自分の浅慮を反省させられる。

このパートの最後には「三十一谷人」の印鑑が置かれている。昨年、ここで福沢が江戸を33年、明治を33年生きたという解説を読んだ台湾の日本研究者の方が、二つの時代を生きるということについて話をはじめてくれた。学生も巻き込んで(海外からの日本研究者を案内するときは、必ずゼミ生に声をかけて同行している)話は広がり、ちょうど今年が明治一五四年、つまり日本は戦前と戦後を七七年ずつ生きてきたことをどう考えるかという議論につながった。

続く「智勇の章」には福沢が編み出した数多くのことばが出典と共に並べられているが、ここでは面白いことに日本人の政治学者が多く反応してくれる。政治制度、政治哲学、比較政治、政治コミュニケーションなど、それぞれの専門に刺激を与える言葉が並び、人間と政治に通底する問題意識を喚起される。なかでも「活用なき学問は無学に等し」は痛烈に響くようだ。

『文明論之概略』の版木のところでは、著作権の確立に向けて尽力した福沢の努力にみなさんが関心を示すな

かで、二次創作について研究する学生が、版木をコピーした人たちの地道な努力と創造性の欠如を指摘した。同行していたドイツからの研究者がとてもその指摘を面白がり、そこから近代の二次創作について話が広がった。

そのやりとりを横に、私はつい、この版木はそれなりに数があり、かつては海外大学と交流する際にプレゼントされていたという小咄に走ってしまった。だが、ここまで福沢の青年期の体験をトレースしてきた見てきた閲覧者にはそれさえも、慶應が伝統的にグローバルに展開しているという理解につながったようで、ある学生は、五カ条の誓文が掲げた日本の近代の理念を慶應が体現していると感じたと話してくれた。夢をもってよい。それを実現する社会を作る。そのために古い悪しき習慣は廃し、世界に知識を求めていく。その通りだろう。なお、この小咄の伏線は、続く大学部設置のところで回収される。

「独立自尊の章」では、学生も研究者も学徒出陣に引き寄せられる。ここで対話をした記憶はない。皆、自分のなかで自省し、言葉にならない言葉を心のなかで巡らせているのだろう。

最後に待つ「人間交際の章」では、前章にあった女子学生募集とその断念のパネルとの関連から、ジェンダーの話題が広がることが多い。福沢後の慶應が女子教育の意向を強く持っていたことは、現在の学生たちにも大きな後押しとなるようだ。

見学を終えたあとは、時間が許すかぎり、1階のカフェで感想を伺っている。一般の方は慶應の歩んできた道への所感を感慨を持って語ってくださり、新入生はその一員となった喜びを語り、2、3年生は自分の研究にどう活用できるかを生き生きと話し、4年生は自分のこれからの生き方と照らして論じてくれる。研究者はそれぞれのテーマとのつながりを闊達に議論してくれる。過去と未来をつながる場ができた喜びを改めて感じる。

こうして塾内外、国内外からの来訪者を案内していると、何度も実物資料と向き合うことを通じて、義塾と自分のありようを考える機会をもらっていることにも気が付く。塾長が近時しばしば「慶應義塾の目的」に言及されているのも、そうした経験がさせているのだろう。

「一身独立して一国独立す」「学問に凝るなかれ」「すぐに役に立つ人物はすぐに役に立たなくなる」「この人民にしてこの政治あるなり」。展示館で出会う言葉たちは、そのときどきの私たちに対話の鳶口を投げかけてくれる。展示館を訪ねることは、自分の過去を顧みて未来を想う、過去と未来をつなぐ歩みなのかもしれない。



「歴史」を学ぶことの普遍的な重要性と 展示館から得られる「智徳」

慶應義塾大学大学院
法学研究科公法学専攻 博士課程1年 川原 慶己

「徳義の事は開闢の初より既に定て進歩すべからず、智恵の働は日に進て際限あることなし」¹⁾——文明の進歩の必要条件たる、性質の異なる両者を身につけるためにはまず、単なる事象の羅列にとどまらない、先人の様々な「想い」や「悩み」の積み重ねの記憶としての「歴史」を学ぶことが、「時代」や「専門領域」を超えて普遍的に重要であるということ、慶應義塾史展示館の展示物を通して、窺い知ることができる。

「明治14年の政変」を契機として福沢諭吉と明治政府の関係が途絶えていたことは歴史上の事象として著名であるが、今年1月の新収資料展における、井上馨主催の「観桜会」出席の意向が記載された明治29(1896)年4月10日の書簡は、「想い」の積み重ねとしての「歴史」を表す具体例である。約束を反故にした相手に対しても交流を再開させる福沢諭吉はまさに「徳義」を体現しているとともに、「官」と「民」との関係性の在り方についての「智恵」を後世に生きる我々に対しても明確に教示しているからである。常設展において、学者の名よりも先に政治家である伊藤博文の名が記載された明治24(1891)年6月23日開催の『言海祝宴次第』を目にした福沢諭吉が自身の名を黒塗りにするという衝撃的な展示物があるが、その後書かれた「観桜会」出席の意向の書簡の存在を知ることによって、このときの行動も決して怒りに任せたものではないということ、を推し量ることができる。すなわち、「民」は「官」の下に位置する存在ではないということ、「時代」を超えて普遍的に人々の心に訴えかける福沢諭吉のメッセージであったのではないかと想像することができる。このメッセージは、「政府は国民の名代にて、国民の思う所に従い事を為す」存在であり、罪を犯すことは「政府の作りし法を破るに非ず、自から作りし法を破る」ことであって、「その法を破て刑罰を被るは、政府に罰せらるゝに非ず、自から定めし法に由て罰せらるゝなり」²⁾という文言にも表れている。

慶應義塾大学大学院法学研究科において刑事法を専攻し、政府ではなく国民「自から作りし法」としての刑法の「智徳」を積み重ねる途上にある私にとっても、「歴史」を学ぶことは重要である。近現代日本の刑法理論は、フランス法やドイツ法の議論を唐突に取り入れたわけではなく、科学技術の発展をはじめとする当時の日本社会の

急激な変化のなかで、外国法の条文ないし理論を採り入れることが必然的に促されてきたという社会的背景が存在し、その潮流はまさに連続した一筋の「歴史」といえるからである。そして私の研究テーマのひとつである過失犯論もまた、社会的背景の変化に伴う激動の刑法理論の変遷の渦中において、刑法総論における独立した一つの論点としての地位を徐々に高めていくという歴史的潮流が存在する。したがって「歴史」を学ぶことは歴史学を専攻する者にとどまらず、「専門領域」を超えた幅広い人々にとって普遍的に重要である。

現代の文明は、「人工知能(AI)」をはじめとする、人間以上の能力を発揮する最先端科学技術の人間社会への浸透を目前にして、「人格」とは何かという根本的な問題まで問われ始めている。19世紀の産業革命や20世紀の高度経済成長期における工業化は科学者の努力の結晶であり、現在に至るまで我々の生活を豊かにしてきたという歴史的経緯と同様に、21世紀に生きる我々は「AI」という言葉を耳にしない日はもはや一日もなく、これは最先端科学技術が人間社会にとってすでに不可欠な存在となっていることの証左である。ただ、産業革命に伴う資本主義の発展は犯罪の増加をもたらし、高度経済成長期に伴う工業の発展は稀に悲惨な事故を発生させるなど、科学技術は時に負の側面も生じさせてきた。最先端科学技術は我々人間の社会に豊かさをもたらす一方で、開発者たる人間の手を離れ「自律的学習」を行うという特殊性を有するがゆえに、人間と最先端科学技術が複雑に関与する事故が発生した場合には、その責任の所在が問題となることが考えられる。便利な最先端科学技術の負の側面を最小限に抑え社会に適切に受容されるためにはどうすればよいかという難題を解決するためには、自然科学の研究者のみならず、人文科学・社会科学の研究者も常に意見を交わし合い、ともに取り組んでいくことが日本および世界全体において喫緊の課題となっている。

最先端科学技術をめぐる上述の問題解決の糸口を探るためには「人格とは何か」あるいは「法とは何か」といった文明の進歩の核心に迫る問題に対して、現に存在する法律(実定法学)を運用するのみならず、法制史や法哲学といった「人格」や「法」の本質に迫る学問(基礎法学)の素養の習得が不可欠である。戦前の新カント主義が戦後の刑罰論の教育的側面の発展の一端を担っていく

1) 福沢諭吉著・戸沢行夫編『文明論之概略』(慶應義塾大学出版会, 2002) 巻之三 第六章「智徳の弁」180頁

2) 福沢諭吉著・小室正紀=西川俊作編『学問のすゝめ』(慶應義塾大学出版会, 2002) 第六編「国法の貴きを論ず」60-61頁

系譜³⁾や、カントの実践理性としての「意志 (Wille)」と経験的な「意思 (Willkür)」の関係性⁴⁾は、「人格」の本質が「法」の本質に影響を及ぼす例のほんの一部である。このように、社会的背景や科学技術は異なっても同じ「人格」を持った先人がどのように時代の趨勢に向き合ってきたのかという、「想い」や「悩み」の足跡を歴史的に幅広く調査することによって前述の難題に肉薄していくことが、社会を豊かにするために国家ないし文理の垣根を超えた現代の学者一人ひとりに課せられた使命であると考えられる。

以上の点を踏まえて、依頼を受けた内容のひとつである「展示館への希望」を、僭越ながら、感想とともに幾つか書き綴ることとしたい。

まず、戦前から戦後にかけての転換期における慶應義塾に学問的関心がある。三田キャンパスには戦争の痕跡が至るところに残されているため、展示館の戦時及び戦後の展示物に関心を抱いた。法学の分野においては、明治時代に欧米由来の法律や制度を導入したものの、いわゆる十五年戦争期に入ると「日本法理運動」⁵⁾とよばれる日本政府の戦時政策に沿う流れが見られるが、当時の慶應義塾は、小泉信三の「訓示」をはじめとして、その流れに屈しまいとする意志の強さが存在していたことを窺い知ることができる。したがって戦前から戦後にかけての変わりゆく時代における慶應義塾の「智徳」を特集した企画に興味がある。

次に、後世の人々への「メッセージ」を探索したい。展示館見学の際は例外なく、前述の最先端科学技術をめぐる問題意識を念頭に、福沢諭吉をはじめとするかつての慶應義塾の指導者が、現代に存命であれば我々に投げかけていたであろう「メッセージ」に想いを馳せながら展示物を注視している。とりわけ、常設展に展示されている矢田績宛福沢書簡に記載された「蚕卵紙」の比喻からは、「学者を育成しているのではなく、社会の先導者を育成している」というメッセージが痛烈に伝わり、学者を目指す者として襟を正す想いとなった。このほか、昨年春学期の企画展「慶應野球と近代日本」において展示されていた明治26 (1893) 年の時事新報社説「体育の目的を忘るゝ勿れ」からは、「運動だけでなく学業を疎かにすること勿れ」という趣旨のメッセージを読み取ることができ、これも後世に生きる私にとって、示唆に富むものである。かつての慶應義塾の指導者による後代に向け

た叱咤激励が集約された企画があれば、是非見学したい。

「明治14年の政変」をはじめとする歴史上著名な事象にまつわる資料は、学問的に極めて参照価値の高いものばかりであるが、日常生活における福沢諭吉にも興味がある。たとえば、妻が正面玄関にて正座をして主人を迎える武士の伝統的な文化を嫌い、正面玄関ではなく別の入口から家に入り妻を驚愕させるエピソードは大変興味深い。また、大正12 (1923) 年の三田キャンパスの模型や、自宅の書斎の硯を目の当たりにして、福沢諭吉が学問や仕事に没頭していた環境や、晩年の散歩コース及び当時の町並みの様子、さらには、歴史上の事象を辿るのみでは到達し得ない「想い」に関心を抱いた。日頃の福沢諭吉の人柄が垣間見える日常会話やメモに関する資料、自宅の室内を再現した企画があれば、是非とも実見したい。

展示「物」はもちろん、スタンドグラスを含む展示館全体から発せられるあらゆる「メッセージ」に感銘を受けずにはいられない。福沢諭吉の言葉のなかでも、常設展「智勇」の章で記載されている「学者は国の奴雁なり」という言葉は、とりわけ琴線に触れるもののひとつである。なぜなら私が慶應義塾に憧れ続ける2つの理由が表出されているからである。それは、伝統を大切にしつつ常に新しいことを開拓しようとする精神と、立場や年齢の違いに関わりなく一人ひとり一つの「人格」として尊重する校風である。「人の説を咎む可からざるの論」⁶⁾にて述べられている点において、前者だけでなく後者も表現されており、学者を目指す私にとって大変心強く、発憤興起させる言葉である。前者は常設展に展示されている福沢諭吉の「居合刀」や、『慶應義塾之記』に記された「自我作古」の理念にも象徴的に表れており、後者は福沢諭吉と松永安左エ門の遭逢が印象的なオープニング映像からも看取することができる。

慶應義塾史展示館は、私にとって、迷ったとき、落ち込んだ時、さらには新しい何かを始めようとしたときに、「退かざる」ことを選択させる空間である。展示館の入口をくぐると視界に広がる「気品」溢れる装飾と、カフェ八角塔から漂うコーヒーの香りに心を落ち着かせながら、展示物の有する活力を享受することが、研究生活における1番のモチベーションとなっている。今後も繰り返し訪問し、「歴史」が普遍的に重要な「智徳」であることを噛みしめながら学び続けていきたい。

3) たとえば、小野清一郎『犯罪構成要件の理論』(有斐閣, 1953) 307頁。

4) 後津安恕『私法理論のパラダイム転換と契約理論の再編—ヴォルフ・カント・サヴィニー—』(昭和堂, 2001) 138頁など。

5) 小野清一郎『日本法理の自覚的展開』(有斐閣, 1943) など。

6) 福沢諭吉「人の説を咎む可からざるの論」(慶應義塾編『福沢諭吉全集』第19巻, 岩波書店, 1962) 512頁



戦う人、愛の人 —回想の寺崎修先生—

都 倉 武 之

寺崎修先生の授業は、ディテールを大事にされた。何年何月何日か、が大事であった。その具体的な事実の積み重ねの上に歴史が存在していることを、教えられた。率直に言って、好き嫌いが分かれる授業だったと思うが、私は大好きだった。事実の確認の先に、自ずと歴史の見方が定まっていく、その道程を追体験させてくれる授業だったと思う。

2000年4月に寺崎修研究会の4期生となった私は、要所要所でえぐるように本質を突く先生の言葉に魅了されていった。「横を縦にしても世界からは相手にされない。歴史研究では資料次第で学部生でも日本一になれる。日本研究で日本一になれば、世界一だ」という煙に巻くような名言には心を鷲づかみにされた。「三田祭が終わって紙屑になるような文集を作っても意味が無い、学部生でも残る研究は出来る」——この言葉を、私はいま、自分のゼミ生に毎年繰り返している。何を書くにしても1つは「へえ」と思わせることが無きゃダメだ、どんな小さなものを書くときでも名前が出るものを書け、無名より悪名だ、といった言葉も叩き込まれた。

先生はゼミ生と同じ時をたくさん過ごして下さった。愛煙家で、よく旧南校舎の廊下の灰皿をゼミ生と囲み、三田の喫茶店白十字にも連れて行ってくださった。真宗の僧侶でありながら御自身の誕生日がクリスマスイブなので、この日に何の予定もないゼミ生を誕生会兼残念会としてご自坊に集めて鰻丼を御馳走して下さるのが恒例だった。一見強面の先生を酒豪と勘違いして(実は下戸)毎年送られてくる大量のビールのお歳暮の処理係として、ゼミの後輩たちを引き連れて先生宅に伺うのも楽しみだった。他の先生が留学するとき、大学院生をよく預かり、さして熱心に指導されるわけでもないのに、その院生たちはことごとく寺崎ゼミを第二の故郷にしてしまった。

学問上は、特に手塚豊先生の話をよく伺った。調査対象の自由民権運動家の戸籍謄本取得から着手し(かつては誰でも取れた)、墓探しまで徹底して行う愚直な実証主義は、マルクス主義全盛で細かい事実を軽視した理論先行の学界への静かな批判であるとともに、実は民権家たちを都合良く褒めそやす学界主流派よりも彼らを人間扱いた愛に満ちていたように思う。

先生との雑談で伺った、福沢諭吉の関与した判決不明の裁判に興味を持ち、卒論のテーマに選んだ。いわゆる

ビギナーズラックで、図書館で調べ始めて1時間と経たずに大審院判決書を見つけ、そこから私も愛知県の事件現場を訪ね歩き、墓石までたどり着いた。先生は、国民の権利として判決原本を今も閲覧できるのだと、自ら申請し最高裁判所まで連れて行って下さった。さらに当時編纂中だった『福沢諭吉書簡集』の註にこの執筆中の卒論を挙げて下さり(第3巻111頁)、完成後『近代日本研究』に掲載して下さい。「アナタには、向いてると思う」という言葉で、私は今ここにいる。

折々の刺激的雑談も心に響いた。旧帝大勢が理事長を決めてきた、某学会の不文律を、慶應勢で団結して壊した話は痛快だった。理事長選挙を制した後、旧帝大側を代表するある著名な先生とホテルのロビーで対峙した場面は、ハリウッド映画にでもなりそうな迫力で、多少出来すぎに思えたが、後にその時の相手方の先生と私が隣同士で食事を取る機会が巡ってきたときに、「私は寺崎門下で…」とわざと名乗り出たら露骨に苦々しい顔をされたので、嬉々として先生にご報告にあがったものだ。

先生には独特の風格が漂い、1997年に駒澤大より慶應に戻ってわずか3年で、應援指導部長に就任されていた。法学部在籍わずか11年でのご退職で、実は名誉教授となるには年数が足らなかったが、途中まで誰も気づかず、結局、年数ではなく学部長権限での称号付与条項の適用を受けたと伺った記憶がある。

2008年に武蔵野大学長に就任されてからは、「どんなに立派なことを謳ったって、まず偏差値を上げなきゃ勝負にならない」などと公言して発破をかけていることを、よく楽しげにお話になった。別の土地の買収計画を匂わせながら、土壇場で晴海の現有明キャンパスの地に乗り換えてスムーズに入手した機転や、本来なら認可申請に多大な労力を割かれる学部「新設」を周到的準備により届出だけで済む「改組」で実現した手腕も語り草となっている。着工前の学校用地が私立の場合だけ課税される官民差別の不当性を熱く論じられていたのも懐かしい。先生の活力の源は、常に激しい闘争心を滾らせる問題発見であり、それが先生の福沢精神であった。

慶應義塾史展示館をご覧いただけたことは、せめてものご恩返しと言えるだろうか。「こんな資料を見つけた」「あんな発見があった」と報告し、「へえー、そりゃアナタが早く書かなくちゃ」と叱咤して下さい先生はもういない。その寂しさが、日を追うごとに深まっていく。

新収資料紹介

令和4年10月から令和5年3月までの間に、福沢研究センターに収蔵された資料の一部を紹介します。すべての資料をご紹介できませんが、この場をお借りして御礼申し上げます。

① 福沢諭吉書幅

「本来無一物とは云ひながら無物の辺には自から勢力の大なるを見るべし 明治三十二年秋 福病翁」 1幅 【寄贈】
明治31年(1898)9月に脳卒中発作に倒れた福沢は、療養中に書の練習を繰り返した。これもその頃の書で、病後であることを示す落款印「明治卅貳季後之福翁」が左下に捺されている。福沢の五女・潮田光の息子の元慶應義塾長の潮田江次の子息に嫁いだ女性の妹長谷川友子氏より寄贈された。

② 福沢諭吉書幅

「一面真相一面空 人間万事邈無窮 多言話去君休笑 亦是先生百戯中」 1幅 【寄贈】
福沢晩年の著作『福翁百話』の題詞として知られる七言絶句。人生は小児の戯れのようなものであるが、戯れと知りながらまじめに世渡りすることが人間の本来のあり方であるとの意を述べたもの。北川彊志氏より寄贈された。

③ 福沢諭吉漢詩「積財如上山 散財如下山 熱界人多少 誰能上下山」 1幅

【購入】

財産の貯え方、使い方についての五言絶句。これは福沢が破棄したものを傍にいた葦原雅亮が拾得し、置いてあった福沢の印を片っ端から捺したものという。『福沢手帖』16号に富田正文による解説がある。

④ 柴原和宛福沢諭吉書簡 明治8年8月26日付、明治11年2月10日付 2通

【購入】

2通はいずれも千葉県長沼村における長沼の利用権をめぐる紛争—いわゆる長沼事件—に関するもので、福沢は長沼村民の願いにより県への嘆願に協力した。これらの書簡では千葉県令の柴原和に対して長沼村の漁業・採藻権や長沼の払下の可能性を問いつけている。昨年開催した「福沢諭吉と『非暴力』」展開催時は福沢の下書きのみ確認されていた。

⑤ 元野球部監督・腰本寿使用のストップウォッチ

【寄贈】

大正15年～昭和10年まで体育会野球部の監督を務め、六大学野球リーグ優勝7回の黄金時代を築いた腰本寿の旧蔵品。ハワイ出身でアメリカのベースボールに精通していた腰本は科学的な方法への意識も高く、ベースランニングタイムの計測などで使用した。腰本時代の野球部主将でのちに高野連会長を務めた牧野直隆が小野三千磨を介して腰本家より譲り受けたもので、その子息牧野元晴氏より寄贈された。

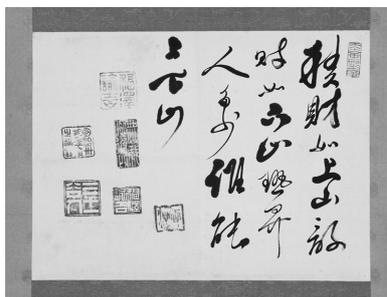
①



②



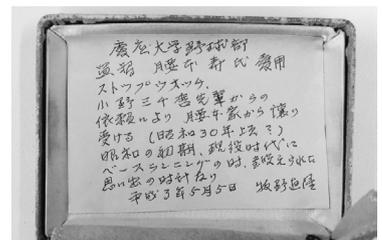
③



⑤



⑤右の画像は、腰本監督時代に野球部主将を務め、このストップウォッチを保管していた牧野直隆自筆のメモ。このストップウォッチはゼンマイ式で現在も正常に作動する。



(文責 横山寛)

主な動き

■ 慶應大阪シティキャンパス (KOCC) における福沢研究センター講座

2022年度は、テーマを『『学問のすゝめ』150年』とし、会場参加(定員25名程度)およびオンラインのハイブリッド形式で以下の通り開催した。各回対面とオンラインの合計で60~80名程度の参加者があり、講演後の質問も活発で盛況であった。

2022年11月27日(日) 都倉武之君
怨望・暗殺・長沼事件

—『学問のすゝめ』が目指した社会を考える—

2023年1月28日(土) 平野 隆君
「起業のすゝめ」としての『学問のすゝめ』

2023年2月25日(土) 米山光儀君
(田園調布学園大学・大学院教授、当センター顧問)
『学問のすゝめ』と明治の学制

2023年3月5日(日) 西沢直子君
『学問のすゝめ』のはじまり

2023年3月12日(日) 井奥成彦君
「一身の独立、一国の独立」



■ 福沢論吉協会との共催による読書会

11月12日(土) 東館ホールにおいて、『『福沢論吉と丸山眞男』を読む』をテーマとして、法政大学法学部教授の河野有理氏を講師に迎え、読書会を開催した。

当日は、河野有理氏のご意見に、著者平石直昭氏が答える形式で進められ、最後に会場からの質疑応答があり、盛会のうちに幕を閉じた。参加者数は36名であった。

■ 新中津市学校市民講座

新中津市学校の市民講座は現在当センターで著作集の刊行を進めている「小幡篤次郎」をテーマに開催された。6月4日の第1回に続き、11月19日(土)には川崎勝氏による「知られざる小幡篤次郎」を開催(参加者30名)、9月17日から延期されていた平石直昭氏の『『文明論之概略』と小幡篤次郎』は、2023年3月25日(土)に西沢直子君の代読と解説で行なわれた(参加者56名)。



■ 『近代日本研究』第39巻

『近代日本研究』第39巻が2月末日に刊行された。今回の特集テーマは「日英同盟再考」。5名の方から寄稿いただいた。また、査読を通った論説4件と、福沢論吉書簡など新収資料を掲載した。

■ 諸会議

- * 執行委員会(10月13日、11月10日、12月1日、1月12日、2月2日、3月2日)
- * 小幡篤次郎著作集刊行委員会(11月9日(Zoom)、1月26日(メール審議))
- * 第2回福沢研究センター会議・慶應義塾史展示館所員会議(12月22日)
- * 第3回福沢研究センター・塾史展示館合同運営委員会(3月2日)
- * 小幡著作集編集委員会(Zoom)(3月16日)
- * 『近代日本研究』第40巻編集委員会(3月30日)

■ 人事

- <専任所員> 退職 住田孝太郎(特任助教) ～3月31日
- <運営委員兼所員>
- 退職 井奥成彦(文学部) ～3月31日
- <所員> 退職 梅津光弘(商学部) ～3月31日
- <顧問> 退職 寺崎修 ～12月3日(逝去による)
- <研究嘱託> 退職 石井寿美世 ～3月31日
- 退職 石田幸生 ～3月31日
- 退職 金沢裕之 ～3月31日
- 退職 三科仁伸 ～3月31日
- 退職 吉岡拓 ～3月31日
- (上記5名は4月1日～客員所員)
- <訪問教授> 王賢鍾(延世大学教授) 2023年2月1日～4月30日

■ 主な来住

- * 駐日マルタ大使来訪(10月5日)
- * 慶熙大学イ・グムバ氏、塾史展示館見学のため来訪(10月21日)
- * 成田市長沼区役員、塾史展示館企画展見学のため来訪(10月29日)
- * 啓明大学国際学研究所金明洙氏来訪(11月7日)
- * 白井厚ゼミ、塾史展示館見学のため来訪(11月12日)
- * 小川不二夫氏、塾史展示館見学のため来訪(11月12日)
- * 塚本悠策氏来訪(12月8日)
- * 中津市教育委員会教育長栗田英代氏来訪(1月24日)
- * 駐日スリランカ大使来訪(1月24日)
- * 日本新聞博物館工藤路江氏来訪(2月7日)
- * 三田ホッケー倶楽部来訪(2月20日)
- * 横浜初等部、塾史展示館見学対応(2月22日)
- * 深谷市渋沢栄一記念館来訪(3月14日)
- * Nancy Ukai氏、日系人Hatsuaki Wakasa氏調査で来訪(3月16日)
- * 豊前市長来訪(3月24日)

■ 取材対応

- * 塾生新聞(10月19日対応、塾史展示館企画展)
- * 日経新聞(10月26日対応、福沢と大隈)
- * 共同通信(10月27日対応、野球伝来と平岡源)
- * 塾生新聞(10月27日対応、原理研と学生運動)
- * 塾生新聞(11月14日対応、1万円札と福沢関係)
- * 読売新聞(11月17日対応、塾史展示館紹介)
- * 東京新聞(12月5日対応、宮沢レーン事件関係)
- * 東京六大学野球春季公式ガイドブック(12月13日対応、野球部の全生園訪問)

■ 出張・調査

- * 都倉、横山、塾史展示館企画展資料集荷のため成田市長沼出張(10月7日)
- * 都倉、横山、資料調査のため上原家訪問(10月22～24日)
- * 都倉、横山、資料受取のため秋山氏宅訪問(11月29日)
- * 都倉、資料調査のため大森氏宅訪問(12月22日)
- * 都倉、横山、日吉寄宿舎にて保存工事状況確認立会(2月20日)
- * 西沢、資料調査のため大阪公立大学杉本図書館訪問(3月6日)
- * 西沢、資料調査のため中津市出張(3月24～28日)
- * 都倉、横山、三菱史料館訪問(3月31日)

■ 講師派遣

- * 都倉、神戸慶應倶楽部例会講演:「神戸と福沢論吉・慶應義塾」(10月6日)
- * 都倉、仙台三田会講演:「福沢論吉と野球」(10月15日)
- * 西沢、大和市文化創造拠点シリウス講演:「今読むべき世界の

- 名著③『学問のすゝめ』～男女の平等を考える～(10月20日)
 - * 都倉、安曇野市文書館講演:「上原良春・龍男・良司三兄弟の資料を通して見る戦時下の「自我」」(10月23日)
 - * 都倉、慶應通信文学会講演:「慶應義塾と日吉キャンパス」(10月30日)
 - * 平野所長、朝日教育会議の基調講演:「福沢論吉と門下生たちのアントレプレナーシップ」(11月2日収録、11月13日公開)
 - * 都倉、塾史展示館企画展ギャラリートーク(11月8日、12月3日)
 - * 都倉、慶應義塾全国議員連盟講演:「公に尽くすとは」(11月11日)
 - * 川崎客員所員、新中津市学校市民講座にて講演(11月19日)
 - * 西沢、Pre-TECHNOMALL2022(Zoom)で講演:「福沢論吉の女性論に学ぶD&I」(11月21日)
 - * 都倉、KOCC福沢研究センター講座にて講演(11月27日)
 - * 井奥所員、福沢論吉記念第61回全国高等学校弁論大会(中津市)(12月2日)
 - * 都倉、SFC高等学部説明会(12月7日)
 - * 都倉、岡山三田会講義:「緒方洪庵と福沢論吉」(12月15日)
 - * 都倉、連合三田会WEBセミナー収録:「学問のすゝめの破壊力」(1月13日)
 - * 都倉、芦屋三田会にて講演:「慶應義塾史から見た2022-2023年」(1月15日)
 - * 都倉、港北区港北地域学講座にて講演:「日吉台地下壕の歴史」(1月16日)
 - * 平野所長、KOCC福沢研究センター講座にて講演(1月28日)
 - * 井奥所員、福沢論吉先生123回忌法要時講演会(中津市)(2月3日)
 - * 都倉、関西三田体育会講演:「福沢先生・小泉先生と塾體育會」(2月18日)
 - * 都倉、慶應高校野球部壮行会講演:「慶應義塾高校野球部とEnjoy Baseball」(2月21日)
 - * 都倉、新宿紀伊国屋書店トークイベント学問のすゝめ150年講演会にて講演:「『学問のすゝめ』はこんなに面白い!!」(2月22日)
 - * 米山顧問、KOCC福沢研究センター講座にて講演(2月25日)
 - * 西沢、エジプトのガララ大学平和記念センター国際交流基金によるプログラムにて講義(Zoom)(3月2日)
 - * 西沢、KOCC福沢研究センター講座にて講演(3月5日)
 - * 都倉、学生総合センター企画「福沢論吉先生ゆかりの地を旅する」(信濃町史跡ツアー)(3月8日)
 - * 都倉、学生総合センター企画「福沢論吉先生ゆかりの地を旅する」(日吉史跡ツアー)(3月10日)
 - * 井奥所員、KOCC福沢研究センター講座にて講演(3月12日)
 - * 西沢、新中津市学校市民講座にて平石客員所員の講演を代読・解説(3月25日)
 - * 横山、三田教育会にて講演および塾史展示館案内(3月25日)
- その他
- * 久我、竹屋、大学史資料協議会総会出席(Zoom)(10月5日)
 - * 都倉、久我、横山、西村、港区教育委員会との打合せ(10月11日)
 - * 都倉、FutureLearn打合せ(10月18日、11月8日、16日、25日、12月2日、6日、13日、2月10日、24日、3月3日、10日)
 - * 都倉、KeMCo運営委員会(11月9日)
 - * 福沢論吉協会共催読書会(11月12日)
 - * 都倉、三田メディア協議会(11月30日)
 - * 近代日本の慶應義塾とローカル・リーダー研究会(12月3日)
 - * 都倉、KeMCo編集会議(12月8日)
 - * 都倉、慶應倶楽部会合にて100年史刊行につき挨拶(12月15日)
 - * 都倉、美術品管理運営委員会(12月16日)
 - * 都倉、横山、西村、港区ミュージアムネットワーク全体会(12月21日)
 - * 都倉、港区文化財保護審議会(12月23日)
 - * 西沢、国際センター運営委員会(3月9日)
 - * 平野所長、福沢旧邸保存会理事会(オンライン)(3月14日)
 - * 西沢、福沢旧邸保存会評議員会(3月27日)
 - * 平野所長、西沢、新中津市学校運営委員会(3月27日)

❖ スタッフ一覧

福沢研究センター スタッフ一覧

所 長	平野 隆	商学部教授	平山 洋	静岡県立大学助教
専任所員	西沢 直子	副所長、福沢研究センター教授	藤原 亮一	田園調布学園大学教授・図書館長
	都倉 武之	福沢研究センター准教授	前坊 洋	
所 員	朝倉 浩一	理工学部教授	松岡 李奈	中津市社会教育課中津市歴史博物館学芸員
(兼運営委員)	池田 幸弘	常任理事、経済学部教授	松沢 弘陽	
	武林 亨	医学部教授	松田宏一郎	立教大学教授
	山内 慶太	常任理事、看護医療学部教授	三科 仁伸	拓殖大学准教授
所 員	上野 大輔	文学部准教授	宮内 環	慶應義塾大学産業研究所兼任所員
	大久保健晴	法学部教授	宮村 治雄	
	大久保忠宗	普通部教諭	山田 央子	
	大塚 彰	志木高等学校教諭	吉岡 拓	明治学院大学教養教育センター准教授
	小川原正道	法学部教授	林 宗元	韓国 Catholic 関東大学校名誉教授
	小山 太輝	幼稚舎教諭	Saucier, Marion	
	齋藤 秀彦	横浜初等部教諭	Nguyễn thị Hạnh Thực	Ho Chi Minh City University of Technology Lecturer
	末木 孝典	高等学校教諭	Ballhatchet, Helen	慶應義塾大学名誉教授
	中西 聡	経済学部教授	Knaup, Hans-Joachim	慶應義塾大学名誉教授
	馬場 国博	横浜初等部長、湘南藤沢中・高教諭		
	Millán Martin, Alberto	経済学部准教授		
	藪本 将典	法学部准教授	研究嘱託	大庭 裕介
	結城 大佑	女子高等学校教諭		加藤 学陽
顧 問	井奥 成彦	名誉教授		具 知會
	岩崎 弘	元幼稚舎教諭		
	小室 正紀	名誉教授	小林 伸成	東京大学インド哲学仏教学研究室
	坂井 達朗	名誉教授	重田 麻紀	慶應義塾大学文学部古文書室研究員
	松崎 欣一	名誉教諭	白石 大輝	桐蔭横浜大学特任講師
	米山 光儀	名誉教授	柄越 祥子	
客員所員	安西 敏三	甲南大学名誉教授	巫 碧秀	Silk Road Cities Alliance Secretary General
	飯田 泰三	法政大学名誉教授・島根県立大学名誉教授	堀 和孝	関東学院大学非常勤講師
	石井寿美世	大東文化大学教授	山根 秋乃	
	石田 幸生	亜細亜大学准教授	横山 寛	福沢論吉記念慶應義塾史展示館専門員
	區 建英	新潟国際情報大学教授		
	太田 昭子	慶應義塾大学名誉教授	事務局	久我 竜二 事務長
	加藤 三明	慶應義塾名誉教諭		竹屋 早月 主 務
	金沢 裕之	防衛大学校准教授		内田 金蔵 同
	我部 政男	山梨学院大学名誉教授		飯島 典子 事務員
	川崎 勝			渋沢 彩佳 事務嘱託
	佐藤 正幸	山梨大学名誉教授		西村 真由 事務嘱託
	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授		奥山 美樹 派遣職員
	曾野 洋	四天王寺大学教授		岡部 敏和 非常勤嘱託
	高木 不二	大妻女子大学短期大学部名誉教授		柄越 祥子 非常勤嘱託
	戸村 理	東北大学高度教養教育・学生支援機構 高等教育開発室准教授		
	平石 直昭	東京大学名誉教授		

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、12名
(4月1日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第38号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2023年4月30日 (年2回刊)
編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電 話 03-5427-1604
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印 刷 (有)梅沢印刷所